

3 歳未満児の保育

(3) 発達臨床：子どもとのかかわりかた-1

○ 佐々加代子 八木理沙 中原葉子 関根友紀子 山本史子 後藤裕子 大内千浩 松本理絵子
(白鶴学園短期大学) (羽村市立しらめ保育園) (高ヶ坂幼稚園) (杉並区立馬橋保育園) (育成会ひまわり保育園) (大崎保育園)

はじめに

前年度の第51回大会において3歳未満児の保育の基盤には一人ひとりにおいての人間関係の成立過程の育ちがあることであり、その理論的根拠を論じた一報、二報では、その基盤が脆弱であった子どもたちについて、保育者のかかわりによって遅ればせながらもその基盤が成立するという実践事例をふまえて論じてきた。担当の子どもとかわるときにどのようにしたらいいのか、ということが今ひとつわからないのでそこを知りたいという要望を受けていた。ここではそのかわり；発達臨床について論じることとする。

I. 発達臨床のかかわりが求められる背景

産休明けからの保育や長時間長期間の保育が増えてきている。育児放棄とも思われるような親たちの存在もある。若い保育者たちはその養成課程で乳児とのかかわりの機会ももたずに保育者となることも多い。ベテラン保育者であっても最近の子どもたちの保育はむずかしい、とも言う。さまざまな育ちの背景をもって乳児保育の現場にいる子どもたちを前にしたとき、保育の方針の統一性というものが必要とされる。保育者がその保育の時間内に入れ変わったとしても、保育の方針というものが一つであれば子どもはその育ちを阻害されるものではない。一人ひとりの育ちがちがうからこそ、そこに職業人としての保育者に求められる内容；発達臨床；一人ひとりに即していくかわりかたが位置づく。その子どもがどのような育ちであったとしても、発達臨床のかかわりによって育ちの基盤をふまえていく過程が保障されていくことになる。人としての生活の基盤をつくる場としての保育園での生活の時間が長ければ長いほど、その時間内の保育者のかかわり；援助の質が子どもの育ちの内容を決めていくことになる。丁寧な個に即しての発達臨床のかかわりができているのかどうかは、その場の、あるいはその後の保育の質そのものとも連動する。3歳未満の時だからこそ求められる観点であり、かわりである。

II. 発達評価の視点とかわりかた

発達の初期において以下の観点がどのような状態にあるのか、ということが発達の評価の視点になる。発達臨床のかかわりをすすめていくときの重要なポイントになる。

1. 触覚；皮膚感覚；触覚的信号行動系：T

人間関係の基盤の形成には佐々の三種類の信号行動系の育ちをみる。皮膚感覚は、保育者側からみると、子どもを抱いたときに伝わってくる感覚である。子ども

もの側からみると、触られたり、抱かれたりしたときにしずまるとかおさまるということで判断できるものである。(補足資料1参照)この体験がなかなか成立していないことが多い。成立していない、とみなしたときには、保育者がわかるようになるまで、抱く、などから、その感覚を養成することになる。

2. 視知覚；視覚的信号行動系：V

子どもの育ちにおける知覚発達とその内容については表Iに整理して示した。新生児では保育者との顔と顔との距離が20cmでないと、その対象をとらえることができない。その距離を子ども自らを選択できるということはないので、かわる側が保持する、ということになる。このようにしてもらっている場と時間が少ない子どもの場合にはその次の段階に以降していない、ということを経験的に得ている。両者の目と目の距離が20cmを3か月間保持するようにかかわっていると、子どものほうから追視をするようになる。移動能力がまだない時にできえ可能になる。この内容ができるようになっている、ということは、保育において丁寧にかかわられた、ということだとみなせる。しかし、できていない場合には、その感覚がきちんと育っていない、とみなしてかわったほうがいい。その子どもが視覚面において20cmむこうに焦点を合わせることのコツを得ていない場合には、乳児の場合、その距離を保育者が意識してかわることにする。

3. 聴知覚；聴覚的信号行動系：A

聴覚的信号行動系は音声とことばである。それを知覚することができるようになる、ということは音のほうに首を向けることなどの行動として現れる。人の話しや音にきちんと反応することができる、ということである。聞く態度を学んだということと聞きたい、ということがすでにある、ということになる。保育者の声やことばに応答するということは、ことばでのやりとりが可能になった、ということだとみなせる。この聴知覚能力が未熟だとみなされる場合には、視覚的信号行動系における目と目の交わし合い；eye-to-eye contactについても弱い未熟である、とみなせる。

4. 3種類の信号行動系交信が未熟か歪んでいる場合

発達初期のかかわりをはじめから実践する。丁寧に行う。子どもに感覚がきちんと育つまで時間をかける。

III. 発達臨床での子どもの育ち、Sちゃん

表IIに育ちの経過について示した。早期形成型になっている。発達臨床の成果とみなすことができよう。

表Ⅰ Sちゃん母子の母子関係形成過程

段階	母子関係の成立段階	月数	子どもの行動	(両者)の交信	母親のとらえ方
I	模索期		- よく泣く (A)* - 吸う (T)		state 1～5 の変化がわかる
II	接触体験期	5日 10日 16日	- 指しゃぶり - ひとりで寝かせておくときよけいに泣く - くっついていたい (T) - 降ろそうとすると激しく泣く (A) - 授乳期に声を出す (A) - そばで呼びかけると首をまわす (V)	- さわるとおさまる (T) - 抱くとおさまる (T)	- 注文の多い子だと思ふ - くっつけておくとおとなしい - 母親の声の聞きわけができています
III	共有体験期	1 2 3	- 目で人の動きを追う - 自分の方からも声をかける (C→M) - 泣き声の変化 (辛そう、など) - 母親と他者の区別を表情で示す (V) - すべて泣いて知らせる (A) - 人がいなくなると泣く (A) - 声で呼びよせる - 手をのばして母親をつかもうとする - 道で人に会うと泣く (A)	- ずっと抱えていることになる (T) - 声をかけると声が返る - あやすとキャッキッと喜ぶ - 音を出すととびあがって喜ぶ	20cm内で声をかけるとにこにこする (V) - 泣き声が聞き分けられる - 抱きグセがついてしまった - 空腹よりひとりである方がいやみたい - 表情の変化が気嫌の良否のサイン - 声の聞き分けが可能 - 遠くからでもみられていることを感じる
IV	弁別不安期	5 6	- 母親がいないと泣き叫ぶ - 人見知り (見知らぬ者ではしがみつく) - 母親を見つけると1m半はう (V) 1m以内から母親の膝にいき	- 手をさし出すと出す - 抱っこの時しがみついて (T)	だっこが吸盤みたい

表Ⅱ 乳児の知覚発達に関連する行動特徴 (スターンの記述を佐々が整理)

月 齢	乳児の活動	行 動 の 特 徴
出生・新生児	視 線	8 インチ (20cm) 離れたところの対象しか目の焦点を合わせることができない。オッパイを飲む位置では8インチむこうに母親の目がある
	微 笑	非常に反射的なものと思われる諸表情
2 週 間	微 笑	内的なものに起因する内因性の微笑、反射的微笑
6 週 目	視 線	視覚運動系の発達；母親の目をじっとみる。大きく目をあけてみる
	微 笑	外界の諸事象により引き起される外因性の微笑、社会的微笑
3 ヶ 月 は じ め	視 線	- 視覚運動系の成熟 - 視界は周囲8インチ四方に限られなく焦点距離は大人と同じくらいの広さの幅
	微 笑	道具的な行動となり、他の人の反応を得るために微笑
3 ヶ 月 末	視 線	- 大人と同じようにすばやく目を動かしてものを追いかけて視線を固定させたりすることが可能 - 視線を向ける方向を運動的にコントロールすることが可能